



青枢通信も10号目。記念の10号に登場してもらうのは斎藤敏文氏です。トッピーの愛称で会員の皆さんにも親しまれ、青枢に不可欠で重要な作家であり、頼りになる理事でもあり、また、私（米谷）にとっては、飲み仲間でも親友でもあるのですが、同時に、才能豊かな画家として尊敬出来る好漢であります。

斎藤氏はトッピーアートファクトリーというアートワークの会社を経営、店舗やショーウィンドウ、グラフィックデザインから立体造形までもを網羅するマルチなアーティストとして、日々忙しく活動されています。私も時々仕事に加わり、そのユニークな現場で貴重な経験をさせてもらっています。

先日、取材を兼ねて酌み交わしながら、少年時代の話から聞かせていただきましたので、紹介したいと思います。



ファクトリーのアトリエでオブジェ制作中の斎藤氏。スタッフとの制作を進めながら、検証をするアーティストの顔になっていますね。

斎藤少年は岩手で育ち、小学校低学年の頃までは家で絵ばかり描いている大人しい少年だったそうです。

それが高学年になると一転、活発に外で仲間を集めて遊ぶようになり、中学にあがると生徒会活動などにも参加、高校ではラグビー部に所属し、バンドを組んで音楽をやるようになったとか。

その高校で3年間担任であった村井昭二さんという美術家との運命の出会いが斎藤氏のその後に大きく影響します。

村井先生は斎藤氏の才能を見抜き、美術部へ来る様に誘ってくれたそうで、部員にはならなかったものの、美術室に自由に入出入りして絵を描いたりデッサンをしていたそうです。

そんな折、村井先生の紹介で彫刻家の船越保武氏の彫刻展の展示の手伝いをして、第一線作家の作品に感動した事もアートを志すキッカケになったと語ってくれました。やはり本物を見るというのは大事な事なんですね。

そして高校を卒業し、当時はグラフィックデザイナーになる事を夢見て故郷岩手を出て行きます。

上京して東京デザイナー学院に入学、そこから斎藤氏の快進撃が始まります。学生時代からイラストレーションのコンペに出品し、入選・受賞を何度もして、学校の課題ではセオリー通りの作品と自分のやりたい作品の2点を出すという型破りでポジティブなスタイル。さぞや目立った存在だったでしょうね。

この頃、斎藤氏は日本グラフィック展という、若手の登竜門として注目されたコンペに連続出品、受賞されていますが、この日本グラフィック展というのは私も初めて出品したコンペで、若いアーティストが憧れたコンクールでした。私は1度だけの出品・入選だけでしたが、その時に大賞受賞した日比野克彦氏に我々は大いに刺激を受け、斎藤氏はその数年後、日比野克彦賞を受賞しています。

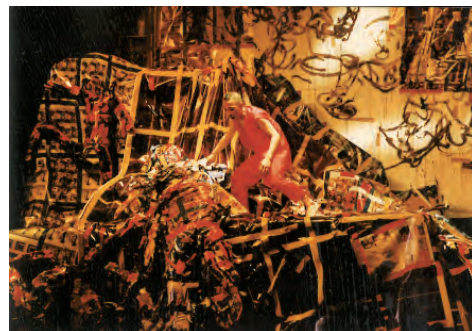
斎藤氏と私は不思議な縁があり、このコンペが現代アートの入口という共通の体験をしています。更に彼のお兄さんがディスプレイを手がける会社に勤めていて、斎藤氏はそこで一緒に仕事を手伝ったりという時期があり、偶然に私もそこでアルバイトをした経験があるのです。そして、斎藤氏が東京デザイナー学院で講師を始めた時、私も縁あって講師をやることになり、知り合ったという次第です。一緒にイラスト科の講師として仕事をし、親しくなるのに時間がかからなかったのは、そんな共通項があったからでしょうか。過去の巡り合わせを知った時はお互いに驚きあったものです。

『天空の出来事』 キャンパス アクリル+パステル+ニス H1600×W5000 2009年



斎藤氏の若き日の作品「ウサギとカメ」。この作品で第5回日本グラフィック展にて佳作賞を受賞します。卒業制作展でも受賞してその後、彼はニューヨークに渡ります。NYでアルバイトをしながら個展も行い、帰国してからの展覧会は自由奔放に立体やコラージュの作品が増えていき、ノイズや音楽も交えたライブパフォーマンスへと発展していきます。右下に掲出の写真は、スーパードライホールでの大掛かりなライブの様子です。

ライブアート 『カミニクノイズ博覧会』 1993年





母校寄贈作品 『少年時代』 2400×3600 2005年

これまで青枢展に出品してきた斎藤氏の教え子達は、かなりの数になると思います。私も学校と一緒に教えていた時期が約5年、その間に彼の教え方にはいつも感銘を受けていました。学生にとってはアートの先生で美術と仕事を両立させている手本になる師匠という希有な存在でありながら、用意周到に授業の準備をし、決して手を抜かない姿勢が学生達を導いているのだらうと思います。

今後は少しゆっくり絵を描きたいという斎藤氏。生活に密着したアート雑貨や気どらない制作を行いながら、青枢の皆と楽しいアートを目指していきたいと語ってくれました。また同時に、熱いけれども重たくない場所としての青枢会を作っていきたいとも。これは全く私も同感で、会の運営が難しくなっている時代だからこそ、そこを目指していかなければいけないのだらうと感じました。

今回、斎藤氏の進化していく作品群を改めて拝見すると、激しく尖った表現から柔らかい空気感になってきている気がするの、そんな想いからきているのかも知れません。

中右『希望』	キャンバス地+和紙	アクリルガッシュ+木炭+鉛筆	2013年
左下)『パーティー!』	木板+エイジング	アクリル+パステル	30号 2014年
右下)『何も望まず風のままに』	100号	ミクストメディア	2014年

斎藤氏の表現領域の広さは、私が出会った同年代のアーティストの中では群を抜いています。

グラフィックデザインからスタートして、平面のイラストレーションに留まらず、立体表現、ライブパフォーマンスでは音楽とダンスとのコラボレーションなど、総合的な活動をされています。

更にファクトリーの仕事では、店舗のアート全般、看板から外壁まで、また照明から家具に至るまでと、メニューなどの小物も含めた全てのアートを手がけて、アトリエは時にグラフィックの会社のようにあり、時に家具制作の工房の様相であったりと様々に変化します。

ファクトリーに出入りする異業種のスペシャリスト達を指揮し、仕事であっても、魂の込められた作品にまで高めようとする彼の姿勢に、常々感動していますし、そうであるが故に、一緒に仕事をする時には心地よい緊張感があり、良い勉強をさせてもらっている感じです。



編 集 後 記

青枢通信もようやく記念の10号にたどり着きました。第1号は2013年6月ですから、3年以上かかっています。少し長過ぎるかもしれませんが、空いた時間に時々作るというスタンスですから、こんなものでしょうか。今後更に工夫していくつもりです、ご容赦下さい。 米谷